入来牧場産黒毛和種肥育牛の体型の特徴

池　田　博　文

目　的

入来牧場では周年放牧方式で黒毛和種を生産し，これを素牛にして肥育試験を行っている。牧場産の肥育牛は一般農家の肥育牛と比較して，体型が異なり肉質等級も低い傾向が見られている。

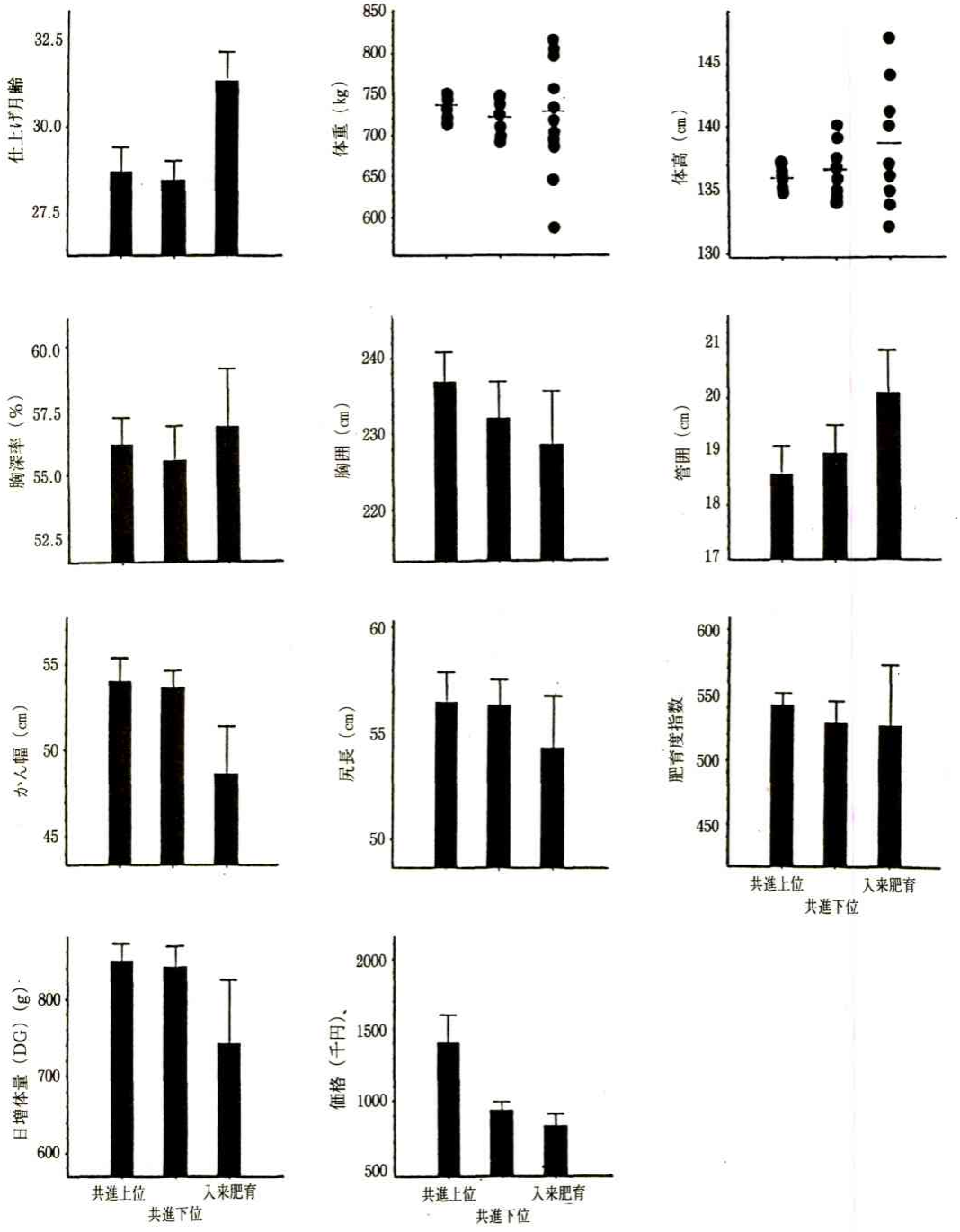
そこで，本調査では牧場産肥育牛と肉畜共進会に出品された肥育牛の体尺測定値，日増体量，肥育度指数，仕上げ月齢および価格を比較し，牧場産肥育牛の体型的な特徴を明らかにし，肥育技術改善の基礎資料を得ようとした。

材料と方法

平成４年10月および11月に出荷した12頭の去勢肥育牛と第42回鹿児島県肉畜共進会に出品された価格上位の12頭と下位12頭の仕上げ月齢，体尺測定値，日増体量（DG），肥育度指数および価格を比較した。

結果と考察

牧場産肥育牛は，共進会出品牛と比較して仕上げ月齢が長くなった。また，胸深率および管囲が大きく，有意な差が認められた。しかし，体重や体高では有意な差は認められず，体高は牧場産牛で高めの個体が多く見られた。一方，胸囲および尻長は短く，かん幅は狭く有意な差が認められた。特にかん幅および尻長は共進会下位牛と比較しても大きな差が認められた。肥育度指数も牧場産牛が有意に低く，牧場産牛は肥育進度が不足しているものと考えられた。更にDGも牧場産牛は少なく，共進会下位牛と比較して大きな差が認められた。これは生時から肥育にはいるまでの間の発育が一般の牛より劣っていることが原因しているものと考えられた。その結果，牧場産牛の価格は有意に低い値を示したが，共進会下位牛との間での差は小さかった。



第１図　入来牧場産黒毛和種去勢肥育牛と鹿児島県肉牛共進会出品牛との体尺測定値、日増体量、肥育度指数および価格の違い